

〈文化史学会例会報告要旨〉

徳川綱吉の儒学講釈からみる幕府政治に関する考察

生活文化研究専攻 修士二年 山田 ちひろ

今回の発表では、徳川綱吉が江戸城の内外で行った儒学講釈から幕府政治を考察することを試みた。綱吉が行った政治の中でも、綱吉の為政者としての意志を解明するために、綱吉の側用人であった柳沢吉保の公日記である宮川葉子校訂『楽只堂年録』（群書類従完成会、二〇一一）を素材とした。その『年録』にみられる、天和二年から元禄四年にかけての綱吉の儒学講釈において、学問の行われた場所・儒学テキストの内容・集まった人々について抽出し、一覧表とした。発表では、柳沢吉保についても検討したがさらに、江戸城内での身分を表す部屋・儀礼についても再確認を行った。今回の発表では、近世社会における儒学の持つ性格や、なぜ將軍やその家臣達が儒学を学ぶ必要があったのか明かにできず課題として残った。修士論文執筆にあたっては、まず綱吉の政策に関する基本的な方向性や、儒学の持つ政治的性格、さらに大名との関係を分析していくことで、政治と学問（儒学）との関連性や幕藩関係を考える一助としていきたい。

平成二十八年六月十五日

四世鶴屋南北『隅田川花御所染』に関する基礎的研究

生活文化研究専攻 修士二年 青木 佑里恵

修士論文では、四世鶴屋南北作『隅田川花御所染』について、先行研究や上演記録の収集、また上演時に使用された諸台本を対応させることで、初演からの上演内容の変遷を整理し、南北研究における作品の位置づけを検討することを目的とする。

今回の発表では、筆者が作成した作品の上演年表に対して分析を行った。分析は、上演の感覚と時代区分を対照させ、初演から比較した上演内容、演出の変化を五つに分類した。さらに、明治から現代までの上演内容について特徴を整理した。

この結果、明治になると『隅田川花御所染』の題名の変化はせず、初演時の構成に近いものでも役の関係性や趣向は異なった上演が増えていくように見られた。また、子供芝居など、上演される環境にも多様化が見られ、これが台本の変容に関係しているように見られた。背景には劇場の増加や歌舞伎上演に関する法制度の緩和などが考えられる。

今後は劇評や上演史のほか、劇場や歌舞伎そのものに関わる制度についても調査し、関係を整理する。

平成二十八年七月二十七日